

崇仁小学校をわすれないためにセンター

2021 年度活動報告



伊達伸明《建築物ウクレレ化保存計画 2000-2021》（2021）せんだいメディアテーク（撮影・佐藤知久）

【2021 年 3 月】柳原銀行記念資料館 2020 年度企画展「夢の新幹線、苦闘の住宅建設運動～自主映画「東九条」の世界 3～」の展示に協力。崇仁地区には、京都芸大建設のため更地が広がる。その真ん中に立つ柳原銀行に、かつて人が多く賑わっていた 1950 年代後半（昭和 30 年代初期）の写真を展示する企画である。

崇仁小をわすれないためにセンターとしては、崇仁及び東九条地区の家や街並みを撮影した写真アルバムのデジタルスキャンに協力した。写真は大きく引き伸ばして展示され、小さなプリントでは確認しづらかった当時の風景を、詳細に見ることができた。崇仁地区にかつて劇場があったことも、これらの写真から確認できる。

同じく 3 月。美術家の伊達伸明さんに依頼していたウクレレ《崇仁小学校 京都市下京区》がついに完成した。2010 年に閉校した崇仁小から 2020 年 5 月に部材を切り出し、約 10 ヶ月。完成を受け、地元でのお披露目を検討。「るてん商店街」（崇仁地区）で行われる地元参加型イベント（5 月 12 日）で初お披露目することとし、検討を進めた。

【5 月】12 日のイベントが、開催者判断で急遽中止となる。コロナ禍による京都府の緊急事態措置（4 月 25 日～）が、5 月末まで延長されると決まったためだ。お披露目は先延ばしになり、振り出しに戻った。

【10 月】崇仁自治連合会の対面での会合が数ヶ月ぶりに開催されることとなり、その場でついに「崇仁小学校ウクレレ」を地元の方々にお披露目した（2021 年 10 月 11 日、下京いきいき市民活動センターにて）。どなたにでも来ていただける形での開催は叶わなかったが、ようやく、直接手に取り弦を鳴らしながら、ウクレレを見ていただくことができた。

音楽室の鴨居。職員室の表札。黒板や案内板など、いろいろな学校のカケラ（現物）からこのウクレレは作られている。手に持ち、しげしげと眺めていると、たしかに在りし日の校舎の姿が蘇る。伊達さんに依頼して本当によかったと、改めて思う。

【1 月】せんだいメディアテーク開館 20 周年記念展「ナラティブの修復」に行く。伊達伸明さんが《建築物ウクレレ 化保存計画 2000－2021》を出品、崇仁小学校のウクレレも最新作として展示されているためだ。崇仁小のウクレレは、会場に入って正面の一等地に置かれていた（写真を参照）。同じ形・同じ寸法だけれど、一つ一つが全く異なる「現物」が並ぶ姿は壮観である。

壁面には、建築物は人間の生活のありようを写す「転写体」である、との伊達さんの言葉がある。そこで思い出すのが、年末に崇仁で見た、倉智敬子・高橋悟の《EREHWON》という作品だ。コンテナの中に真っ暗な無響室を作り、そこに入ることによって、鑑賞者への環境からの視覚的・聴覚的刺激をほぼゼロにするもので、河原町のトンネル上に置かれていた。

無響の暗黒空間に入ると、自分以外のものがなくなってしまう、気が触れてしまうような気持ちになる。逆に考えると、日常空間においては、わたしたちを取り巻く家や建築物や自然や環境が、わたしたちを取り囲むことで、わたしたちを何者かとして生きながらえさせている、ということか。私の活動や記憶は、空間や環境という転写体を持つことでこそ存在する。転写体との関係の中で、わたしたちが作られる。だとすればウクレレは、非常に優れた転写体を新たに作ることに挑戦している作品だといえよう。

「ナラティブの修復」展では、小森はるか＋瀬尾夏美の《11 歳だったわたしは》も興味深かった。10 代から 90 代の男女 60 数名に「自分が 11 歳だった頃のこと」を聞き、その内容を文字や映像にまとめた作品だが、個別の語りを何らかの物語に強引にまとめず、けれども、それぞれの間にゆるやかな連続性や共通性を見出せる作品である。語り手ひとりひとりに応じて作られた展示台。そのあいだを鑑賞者が静かに歩くことを促される動線。テキストと映像をリンクさせながら鑑賞できる構成など、ただ記録を並置するのではない工夫に満ちている。個々人の記憶をリスペクトを持って扱い、個別の記憶にいていねいに触れる、きわめて繊細な「アーカイブ装置」を見る気がした。これほど異なる年代の人たちの顔を、同時にいていねいに見たことは私にはないし、11 歳の子供の視点から過去 100 年という長い時代をふりかえったこともない。抽象性と具体性、此性と普遍性が、鑑賞者自身の聞き・読む行為によってつながっていく。記憶をめぐるアーカイブ的な資料をどのように整理し、どのように展示空間にひらいて活用するかという点だけをとっても、学ぶことの多いすぐれた作品だった。翌日、震災遺構 仙台市立荒浜小学校（仙台市若林区）を見学。2011 年の津波で大きな被害を受けた荒浜地区にあり、被災時には児童や住民たちの避難場所になった学校である。学校の周囲はきれいに土地整備され、そのさきには多数のお墓が並んでいた。屋上に登ると海はすぐ近く。かさ上げされた道の向こうには、仙台市中心部の街並みが見える。整備された風景と、ポツンと残された遺構もまた、わたしたちの活動を映す転写体である。荒浜小学校は崇仁小学校と同じ 1873 年に開校し、2016 年に閉校している。